

ハイスクールD×D・イレギュラーな龍帝

刀花子爵

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

死んだと思ったら転生。

あーDDの世界かでも神様にあってないよ？

特典貰ってないよ？

あ、スマホと。。。なぜに赤龍帝の籠手？

ダメだろこれ？

作者が好きなものを適当に詰めて適当に作ったものですので合わない方はお戻りください。

作者の都合で作り返します。申し訳ございません。

目次

私の名は命	1
命という転生者	6
昔と今	9
英雄なる運命をその手に	13
可能性	16
命かそれとも転生者か	19
やさしさと命	24
逆鱗の一辺	27
出会うはずのない二人	30

私の名は命

神様転生、二次創作でよくある設定の一つだ。

神様のミス、寿命、神様も知らなかったe t cな理由で死んでしまったおり主君が神様から転生特典をいくつか貰いいろんな世界に転生するというもの。

転生特典はいろんなものがあつて。

膨大な魔力、強力な超能力、能力を無効化する能力、もしくはは体質。アニメ、漫画、ライトノベル、その他キャラクターの能力。

大きな力をもらい新しい世界で好きなように生きる。

同じ転生者を倒すもあり、ハーレムを築くもあり、一途な恋をするもあり。

で、私もそのようなものと同じようになってしまったわけだが。

名前、兵藤命（ひょうどうみこと）

性別 男

神器 赤龍帝の籠手（ブーステッド・ギア）あと、なんかスマホ？

家族としての立場 兵藤一誠の双子の弟。

なんだこれ？

いや、別にどこに転生事態に不満は無い。

ただ、事故で死んじゃった自分に生き返らせて、特典くれてしかも、女の子いっぱいのところを送ってくれたんだから。

けどさ、特典として赤龍帝の籠手はダメだろ。

主人公の得意どころというか、まあ唯一な武器を自分も持っているわけ。

『混乱がこちらにも伝わってくるがどうした相棒？』

こっちのドライグも目覚めているわけ。

『それにしても一誠だったか？相棒の兄は？あちらの俺は不憫だな』

まあ、つながっているので自分の記憶もわかるわけ。

…エロはないけどまあ、普通に戦えるわけ。

…まあ、いろいろ考えてるわけです、はい。

でも、男としては兵藤一誠みたいに熱く正直に生きてみたいわけ

で。

『…性欲は薄く、戦闘意欲は強い、アクロバットが好き、かつこいものが好き。一部を除いて。よくもまあここまで子供のよう感じで持ってきたものだな』

俺の趣味暴露するのやめてもらえます！

『しかも、女の好みは人外ときたか、親が泣くぞ』

ほつといてもらえます？

『人外の中でもアラクネや、ハーピィ、…これはないわー』

おいこらてめえ文句があるなら聞くぞこら！

『龍の娘なら人にも慣れるし亜人風にも成れるぞ』

さて、さっさと強くなって嫁さん見つけよう。

ドラゴンてのは強いオスに惹かれるんだろ？なら強くないとなー。

ハーレム？美少女？どうでもいいです。

個人的には人外美少女がいいけども。

偉い人と素人には人外の良さがわからんのだよ。

「何を考えているか知りませんが、どや顔で小さくガッツポーズはやめたほうがいいと思いますよ」

…。

「塔城、見てたのか」

「はい、命先輩が何やら難しそうな表情をしていたので何事かと」

「…見るのはわかるが、私の膝に乗る理由はあるのか？」

いやまあ、別に気持ち悪いとかじゃないんだけど年頃の女の子が同年代の膝の上に乗るのはダメだと思うのだよ。

「私が命先輩の膝に乗るのは、特にありませんなんとなくです」

「思春期の女の子がなんとなくで男の膝の上に乗るな、あほう」

お兄さん塔城の感性に少し不安を持ちます。

「それで、何を考えていたのですか？」

金色の瞳がじつとこちらを見つめる。

「兄のアレをどう止めたものかとな」

転生関係のことを話せるわけないのでそれらしい話題を出す。

だが、私が出した話題はこの学園全生徒にわかるもの。

「…ああ、命先輩の弟さんですね」

「いや、私に弟はいない、てか、兄だ兄」

「並んでも命先輩のほうが上に見えます」

あ、はいそうですかー。

自分、老けてるのかな？

特に老けてる感じはしないんだけどな。

「…そうか」

少しシヨックだ。

私は母親にのせいであの髪型ではないからな…少し寂しくもある。

まあ、まとめているから邪魔にはならないのだがな

それにしても、親も私にべたな名前を付けたものだ。

命とは二度目の命の私にとっては皮肉だな。

「ふっ」

右手をポケットの中に入れて神器であるスマホらしきものを取り出す。

『英雄なる運命をその手に（ヒーロー・ザ・フェイト）』

わかりやすい名前と画面に表示されるFateの文字。

これもまた皮肉だよなあ。

「命先輩もソーシャルゲームなんてするんですね」

「まあ、な」

ゲームと勘違いしている塔城の頭をなでる。

「もう、いい時間だし帰るからのいってくれ」

「はい」

膝からあまり感じなかった重量がなくなる。

「塔城は今から部活か？」

「はい、なので暇つぶしとして命先輩の相手をしていました」

「ずいぶんと上から目線な発言だな、身長は低いのに」

「人が気にしていることをさらりと言ってくる先輩にはちようどいいかと思えます」

「ふっ、また明日な」

「はい」

お互い軽い言葉を交わして分かれる。

私がストーリーに加わってもいいのだろうか。

それを少し考える。

もし、私がストーリーに加われば何かが変わるのかもしれない。

誰かが救われなかったり。

逆に救われたり。

「また来たのか？」

学園を出たコンビ二の前で私の後ろに人が立つ。

「ああ、英雄の子孫ではないがその神器はその資格を持つものと同義だからね。特に俺たちのところは」

振り返る。

そこにいたのは学生服に中国の武将が着るような服着崩している青年。

いや、曹操がいた。

何でも三国志に出てくる曹操の子孫らしい。

三国志とか私、公明と劉備しか知らねえわ。

『英雄なる運命をその手に』は、英雄たちの記録を持ち主の体に宿しその力を使えるようにするもの、しかも他人に付与することもできる。」

なんで本来なかったはずの神器、しかも神様が私にくれたものにそんなに詳しいんですかねえ！

しかも、その能力今知ったわ！

何か？

じゃあ、『約束された勝利』とか『無限の剣製』とか使えたりするの？

個人的には後者が好き。

けどさ、今は面倒なんだよいろんな意味で君とかかわりあうのは。

「前にも言ったが……」

赤く必要な部分しかない籠手が私の右腕に現れる。

「その力はっ！」

そのままの力を開放して私は声を出す。

「私は私の日常にさえ妨害をしなければ敵にはならない、だが味方にもならない。私がするのは救えると思った時だけ目の前で誰かの命が散ろうとした時だけ私はこの力を使う」

「ははっははははははははは、ははははは!!君は、君は英雄になる資格があるにもかかわらず赤龍帝なのか!」

曹操が喜ぶように、楽しそうに、だがどこか嫉妬をはらんだ声で笑う。

「去れ、今日は手を出さないでやる」

赤いオーラが体から漏れ出す。

「そんなに使いこなせるのか!ますますほしくなったよ」

ないこいつやだきもい。

命という転生者

赤き龍の帝王、それが赤龍帝である、ドライグの二つ名だ。

この世に二匹の天龍あり。

赤龍帝、ドライグ。

白龍皇、アルビオン。

相対する能力、倍加と半減。

故に争い、故に封印されし二天龍。

のはずなのに。

(なんで私のところに増えるかなあー?)

兄である一誠に宿っているはずのドライグは、何故か私に。勿論、赤龍帝の籠手もだ。

しかも、敵対関係?になりそうな人間と対峙しているために赤龍帝の籠手は、展開されている。危なくない?

これ悪魔に見つかったら即座に眷属にされるような気が……気の所為?

しかも、ドライグ。

私の方に宿っている方が言うには兄の方にも同じ力が宿っているという。

まじで?!

性格の相性的には兄の方がいいらしいが。

才能は、私の方にあるらしい。

とりあえずは目の前の槍持をどうにかしたい。

しかも少し脅すために力を込めたのに笑ってるよ!

すごく、怖いんですが。

『おい、相棒、あまり出しすぎると悪魔どもに気づかれるぞ』
まじかい。

「私にもう、関わるな」

ドライグにならった転移の魔術で家の近くに逃げる。

「ほんと、どうしてこうなったのかな」

しかも英雄なる運命をその手に……はほとんどプリアのクラスカー

ドに取ってつけたような能力を増やしたもの。

『あきらめるんだな、相棒、ドラゴンを宿す限り平和なんぞありえん』
嫌な事実だねえ。

はああとため息をつき家に帰る。

—へえ、あんたが俺の大将か—

とんでもない声が聞こえたような気がした。

★

夜、誰もが寝ている時間に起きる。

「…今日も行くか」

龍と英雄、その二つを宿しているせいか血がたぎる。

体の奥から力がわく、

血が騒ぐ。

気持ちが高揚しだす。

すでに体が温まっているが暴れたいくなる気持ちを抑えて部屋の窓を開ける。

腰から赤い龍の羽を生やしそれへと飛ぶ。

もちろん窓は閉めた。

軽く血管が浮き上がる。

夜のはずなのに昼のように見える。

ああ、楽しい。

腕で、足で、羽で、頭で。体すべてを使い夜の風を切る。

今この瞬間だけは、兵頭命ではなくただの転生者として、楽しいなあ。

だけど、この瞬間、この時間いまはぐれ悪魔が命をむさぼっていると思うと怖くなる。

自分は戦えるのか？

相手を殺せるのか？

敵に立ち向かえるのか？

頭の中にぐるぐると思い浮かぶ。

「あああああああああ！」

—ああ、悪魔か—

―ドクンっ！―

心臓が大きくはねる、視界が白に染まっていく。

これは…ダメ…な…奴…だ。頼…む…よドラ…イ…グ
『ああ、任せろ』



「また、飲まれたのか」

気が付くとベツトの上だった。

『ドラゴンに大英霊の戦気だ。お前がどれだけ強くても精神だけは英雄とは比べられないさ、それが百以上。飲まれて当たり前だ』

ドラゴン、赤龍帝であるドライグの戦いたいという戦闘意欲、それに数多くの英雄たちの悪を滅ぼすという気持ち、さらに戦闘意欲…一般人の私の精神はいつも飲まれてしまう。

一度、性欲にすら飲まれてしまった。

『あれは、いろんな意味でひどい事件だったな』

多分、フェルグスだろう。

くそう、あのケルト戦士め。

呼び出せるようになったら男としての象徴をつぶしてやる。

昔と今

「生きている、転生前のことをみんなはどう考えるだろうか？
読んだライトノベルの世界に来る前。

自分ならうまくやれる。

この主人公は馬鹿じゃないのだろうか？

ハーレムとかうらやましい。

童貞卒業したいなどなど。

まあ、自分もそう思っていたことはある。

けど、立場がなあ。

一派人なら多少は無茶をしてもいいだろう。

だが自分は、赤龍帝で英雄の魂を引き継いでいるもの。

いろんな意味合いで面倒な存在だ。

「はあ」

おまけに兄から変な感じがした。

多分悪魔になったんだろう。

少し悲しい。

もう、私の兄、兵藤一誠ではなく。

悪魔としての兵藤一誠なのだろう。

少し気落ちしながら顔を洗う。

あーにーと思いつつも、まあ、仕方ないことと自分の中で完結。

『いいのか？ 堕天使に殺され合意もなしに悪魔にされたのだろうか？』

—まあ、そうなんだけど。原作で知ってたから。実はそんなに
ショックはないかな

『そういうものなのか』

—自分は私はそんなものだよ。

まあ、堕天使には仕返しするけどね。

パチ

顔をタオルで拭いてドアを開けようとしたら静電気が走った。

こんな時期に珍しいな。

まあ、いいや。

制服に着替える。

伸びている髪を後ろにまとめ黒いひもで固定する。

首にはお気に入り入りのドッグタグ。

駒王学園はピアスとかには寛容なのでかなり助かる。

家を出てすぐに腕を上げて伸びをする。

「んーっん、いい朝日だねえ」

くそつたれと思うには十分にいい朝だ。

「・・・あ、命先輩」

「ん、塔城か」

家を出てすぐの曲がり角で塔城がいた。

何時もは合わないのにな。

「・・・なぜ微妙に距離を置く」

「・・・なぜか今の命先輩からはピリピリとしたものを感じるので

ピリピリとしたもの？

先ほど静電気だろうか？

今の季節は春だし・・・私はそんなに静電気が溜まる体質ではないは

ずなのだがな。

「まあ、いいか」

特に気にすることでもないかと思いきや学園に向かう。

「・・・待ってください」

後ろから追いかけてくる登場に合わせ歩く速度を変える。

『・・・いいのか？おおよそだがグレモリーの眷属だぞ』

―私にとってはただの後輩だ。眷属なんか関係ない

『そうか』

チャリンと二枚一組のタグがぶつかると。

・・・久々に裏山に行ってみようか。



学校も終わった。

なんか、副会長に見られたけど何かしたかな？

すぐに家に向かうも何かが私を見ている。

『ふん、蝙蝠どもだろうな。おおかたお前の力が漏れたのだろう』

え？いつから！

『今日の朝からだ。言っておくが俺の力ではないもう一つのほうだろうな』

英雄の運命をその手にか？

『ああ、何がカギになったかわからないが力が出ている。朝の静電気もそのせいだろうな』

電気か。

電気の英雄。

記憶にある電気関連の英雄といえば。

…エジソンか？

いや、そもそもエジソンは偉人だ。

まあ、いいや。

考えても仕方ない。

家が見えてきたので少し足を速める。

「ただいま」

ドアを開けてすぐに母に言う。

「おかえりなさい、命。あらどこかに行くの？」

「うん、今日は久々に裏山に行つてくるから帰るの少し遅くなるんだ」

制服を脱いで何時もの動きやすい服装に着替える。

「帰つてきたら風呂に入つてすぐに寝るからいらないや。ごめんね」

「夜は食venaきやだめよ。おにぎりでも作っておくから食venaさい」

「うい、じゃあ行つてきます」

複数の荷物を入れたリュクを背負い家を出る。

「行つてらっしゃい。怪我はしないようにね」

母の言葉を背に受け走り出す。



木刀、槍、弓、斧様々な武器が周りに無残な形で倒れている。

「…嘘だろ」

何時もの裏山。

そこには自分で作った修練場がある。

普通ならばれるだろうが。なぜかここには人は来ない。

小さいころ、この山に遠足で来たこともあるがこの場所だけはなぜかみんな来ないのだ。

ドライブ曰く選ばれたものしか使えない場所らしい。

何それ中二と思っただが自分もそんな存在なので自重した。

そう、普通なら人は来ない。

だからこそ自作の武器を置いておいたのだが。

全て壊されていた。

お金自体はかかっていないがすべて愛着のあるものだった。

中学生の時に技名を叫びながら槍を振った。

かっこいいと思いなながら意味の分からない文字を木刀に彫刻刀で刻んだ。

斧なんか変形できるように作ったのに。

全てが壊されていた。

許さず。

そもそも、ここには選ばれた人しか入れないとかいう痛い設定があつたはず。

壊されたってことは人が来た？

『およそあの槍の小僧だろうなまだ、聖なる力の残滓がある』

曹操、あいつかああああああああああああああ。

『残っている量からする最近だな』

ああ、あいつがどうしてやったのか分かったわ。

『ほう、その心当たりは？』

「勧誘を蹴ったからって人のものに当たりやがって！許さん！」
どれもこれも自信作でしかも大事な私の相棒だぞ！

英雄なる運命をその手に

月日が木をかいくぐり地面を照らす。

目の前には形容しがたい何か。

どくんと心臓らしきものが蠢いていはいるが。

人ではない、獣でもない。

「…化け物か」

スマホの形をした神器。

英雄なる運命をその手に握る。

『使うのか?』

手札を整えておくのがつてのわかるだろ?

『十分な手札だと思いがな』

臆病な、自分は多すぎる方がいいんだよ。

『…Grand Order. start』

あ、そこは電子音ですね。

『…card select class Berserker

ame Lancelot』

おい、今なんつった!

ランスロットつて聞こえたぞおい!



「ああああああArrrrrrrrrrrrthur!」

黒い霧が命の体を覆う。数えきれない感情が心を埋めていく。

知らない人、剣、場所、匂い。

人を殺す記憶。化け物の首を飛ばす記憶。

恋の記憶、すべてが脳裏に流れる。

『命!落ち着け命!』

ドライグが呼びかけるが命の意識はない。

当たり前だ。狂戦士のクラスに落ちたとはいえ円卓最強の騎士。

その思いを願いを、望みを子供に移したことにより己に怒りを抱

く。それが命を侵食するとは知らずに、己を傷つけ命を押し込む。

この場に曹操がいたならば即座に殺されていただろう。

『なんと、某のことを知っているかなら見せてやろう』
体が勝手に動く。

分かる。

振り下ろした一つの斬撃が同時に三つに見える

『秘剣、燕返し！』

目の前の何かが終わる。

『あとは任せよう。そしてよくぞ見た。主なら吾マスターにふさわしいだろう』

…まじか

佐々木小次郎の、誉め言葉を聞きつつも体が痛む。
戦いのせいかな多少は和らいだが、違和感がすごい。

可能性

佐々木小次郎。史実ではないとされている何か。

f a t eでは、佐々木小次郎という形の条件に当てはまる剣士が選ばれたものになっている。

個性がこい英霊の中でもまだまともという。

あの後家に帰って風呂にはいると体が変わっていた。

いや、いい間違えた。体つきが変わっていた。

ほどよく筋の入ったものだった体にはバツキバキの、それも人目でわかるはずの筋肉が。

『言っただろう。影響を受けたせいで体自体が変化していると。湖の騎士であるランスロットを体に宿したせいでランスロットのステータスだったか？それを体がそのステータスに近づけようとしたんだ』

簡単にまとめてくれ。

『お前の体のステータスがランスロットのステータスになろうとしたのさ』

なるほど、分かりやすい。

ということは何か？

今の自分の体はランスロット並のステータスと？

『いや、馴染む前に吹き飛ばしたせいで中途半端になっている。普通の人間にしては上から数えた方が早いだろうが英霊と比べると象と猿ほどの違いがあるな』

憑依経験みたいなものかな？

『近いが違う。あれはあくまでも経験だ。お前の場合は担い手そのものになる。そして種族関係なく混ざるだろうな。下手をすれば魂の崩壊さえあり得るものだ』

ふーん。

まあ、その辺は自分の問題だね。

ん？

急に英雄なる運命をその手にが、出てきた。

でも、自分にはその記憶はないぞ。

『大方、お前の世界の神かなにかに消されたのだろう。』

もしくは死んだお前と魔術師だったお前が融合したさいにお前が表面に出てきてしまったせいかな魔術師としてのお前の記憶は眠っている』

いや、意味わからない。

そもそも、転生したのはあるけど。

平行世界の自分と融合？

なにその隠れ要素。

要らねえよ。

赤龍帝で、その弟で。英雄にもなれてしかも、平行世界の自分と融合？

要らねえよ。

平穩に暮らしたい。

『まあ、可能性だし俺の予測も入っているそう気を落とすな』

ほんとに可能性であることを願うよ。

英雄なる運命をその手にを戻しながら眠る。

命かそれとも転生者か

朝から母が叫んでいた。

「一誠がああ！」

寝不足の頭に高い声が響く。

「…きつい」

寝たのにまさか夢の中で英霊たちと訓練させられるとは。

小次郎曰く深い眠りだとできないらしいが。

くそ、ねむい。

『いるな』

分かつとるわボケ。

まだ眠い。

洗面所に向かって顔を洗う。

「…ばきばきだ」

上が寒いと思ったら上半身裸だった。

見事なシツクスパツク。

きれいな割れ目。

うん、これはこれでいいものだ。

筋が入った見た目もよかったがこれあれだ、体の筋肉がよくわかる

から少しテンション上がってるんだな。

やっぱり多少は筋肉ないとな。

男だし。

「…ふくきよ」

すぐに自分の部屋に戻りシャツを着てリビングに向かう。

「…おはよ」

すでに自分以外がそろっていた。

兄よ朝から鼻の下を伸ばすのはいいが限度を考えろよ。

「おう、命おはよう！」

「…朝から元気だねえ」

兄よ元気なのはわかるから声を押さえてくれ頭に響く。

「おはよう、命」

「…どうも、グレモリー先輩」

すらりと下の名前で呼んでくるグレモリーさんにイラツとしつつも表情を崩さない。

「命、お前なにかかわったか？」

父が何かに気づいたのか言う。

こういうところはやっぱり親なんだなあーと思う。

「特に変わってないよ。ただ昨日裏山で走ってたからまだ疲れが残ってるみたいでちよいきつい」

「そうか、無理なら学校休んでいいんだぞ」

「うん」

疲れだしまあ、ほっといてもいける、むしろここからがである。

変な意地を持ち疲れを押し込める。

★

学園に來れば叫びの雨だった。

『そう、いら立つな。先程からこちらにも漏れているぞ』

そうはいつでも、くそ。

内心舌打ちしながら原因に目を向ける。

「そこには周りの生徒から叫ばれているグレモリー先輩と兄。

どいつもこいつも朝からうるさい。

『まあまあ、そう苛立つものではないぞ主よ』

だれのせいだと思ってるんだ？あ？

遅れて筋肉痛、倦怠感、そして寝不足。

もうやだ、今日なんか休めばよかった。

弟の自分なんかいろいろ聞かれるから見つかりたくない。

さっさと教室にいこ。

もちろん、この後にきちんと目をつけられ捕まった。

そのあとももちろん保健室で寝た。

★

…愛した鬼を殺した。

…王を裏切った。

…剣を振り続けた。

「…くそ。一気に三人か」

断片的にしか見えなかったが三人の記憶が流れてきた。

『大丈夫か?』

まあ、多少は回復したみたいだしいいけると思いたい。

頭は多少痛むが気にするほどではない。

今日はもう帰ろう。

テンプレな転生者のような感性ならどれだけましなことか。好きなだけ暴れられて好きなように行動できる。

だが、自分にハーレム志望なんてない、主人公になりたいという欲もない。

ただ、普通に生きてたらいつの間にか転生させられていただけ。

意味の分からない力と赤龍帝の籠手立場は主人公の弟。

ほしくもない力、ほしくもない立場。

ただ、生きていたかだけ。

生きて死ぬ。

それだけのはずなのに。

なぜ私はこんなところで生きている。

『大将、そこまでにしといた方がいいやつこさん来やがったぜ。』

金時の声が頭に響くがもう、面倒だ。

自分は、ただ普通に生きたい。

矛盾、自分の考えと思いが相反する事に腹のなかにどろどろとしたものが溜まっていく。

『考えすぎだ』

わかってる。

『命、お前が気にしているのはわかる、だが今は目の前に集中しろ』

『… Grand Order start』

電子音が頭に響く。

それが更に自分の苛立ちを大きくさせる。

「しね、人間」

現れたのは堕天使、すぐに光の槍を投げつけてくるが運命はそれを

許さない。

『… card select class』

読み込むのはアサシンである佐々木小次郎。

再び永光が、手に握られる。

光の槍を永光で受け流しその場で大きく回転させる。

『無駄な動きが多いが、まあ素人ゆえにしかたなしか』

永光で胸を浅く切りつける。

それだけで相手はバランスを崩した。

見下している人間に攻撃されるとは思っていなかったのだろう。

その顔は痛みよりも驚きが出ていた。

「…帰るのなら、手はださない。だが向かってくるなら私も手加減はしない」

苛立ちのせいか煽るような口調になってしまったのは仕方ないだろう。

永光を、半身に構え警戒を解かずに相手を睨み付ける。

向かってくるならその場で切り捨てることも可能だ。

長い刀だからこそすぐに切ることはできる。

およそ三メートルの間合い。

自分の現在のステータスが頭の中に浮かぶ。

筋力 C+

耐久 E+

敏捷 A+

魔力 E

幸運 A

宝具 無し

十分だな。

「きょまああああああー！」

…ああ、やらなきやダメか。

失望、悲しさやるけなき、いろんな感情が混ざる。

震える腕に力を込めた。

『…秘剣・燕返し』

振るう、ただ腕を、ただ刀を、ただ斬撃を。

「・かはっ」

コンクリートの地面に血が飛び散る。

体は黒い翼となり消えた。

…いやだなあ。

『今日はもう帰って休め』

ドライグの言葉にうなずきすぐに家に帰宅した

やせしさと命

学校を休んだ。

小次郎たちも私の気持ちを察してか朝から何もしやべらない。

誰も家にいないことを理由に近くの公園に出てきた。

頭の中に会うのは初めて命を奪うという事を実感した感触。

一瞬で自分は命を殺した。

その事実が私の頭を重くする。

分かっていた、二次創作で堕天使やはぐれ悪魔を殺すのだからよくあつた。

だけど、それは物語だから大丈夫だった。

自分が殺した堕天使はこれからアーシア・アルジェントを殺そうとした一員だ。

だから、自分が殺してもそれは物語的によかった。

「なわけねえだろうがあっ！」

誰もいない公園に自分の叫びが響く。

自分は覚悟もなく命を奪ったんだ。

それが悔しくて悲しくて、辛くて涙が止まらない。

物語？ テンプレもの？ やらなきゃこつちがやられた？

全部ただのいいわけだ。

殺したのは紛れもない事実。

自分は人殺しだ。

「…荒れているようだね」

聞きなれた声が耳に届く。

「…」

変事をしない。

「英雄の力を使って堕天使を殺したんだろう？ 何を悩む」

「黙れ」

力を押さえることなく私は曹操をにらみつけた。

「異形の者は人に殺される運命だなにをなやむんだい」

「異形だろうが命は命だ！あんな簡単に奪っていいものじゃない！」
赤いオーラが自分の体から漏れているのがわかる。

『命、乗せられるな悪魔に気づかれるぞ！』

ドライグが叫んでいるが耳に入っていない。

心の中にたまっていたものを曹操に吐き出していく。

「命なんて簡単に奪っていいものじゃないんだよ！それが異形でも、天使でも悪魔でも奪っていいものなんかじゃない！墮天使を殺したから英雄？ふざけんな！自分はただの人殺しだ！」

言い切った。

そして胸の中にストンと落ちた。

英雄なんて、ただ命を奪っただけの人間じゃないか。

聞かれているだろうが関係ない。

もう、殺すことはうんざりだ。

「だが、君がああ墮天使を殺していなければ犠牲になった人はいらん
だ」

「それでもだ」

言い切る私に曹操はかわいそうなものを見るような目を向ける。

「…君は英雄の資格を持つには優しすぎるな」

優しくなんてない。

ただ殺しなんてしたくないだけだ。

子供のような単純な理由を心の中で吐く。

『主よ、人を切るのはなんであれ悪だ』

小次郎が言う。

もう、だまれよ。

『だがな、その槍使いが言ったように。それで助かるものもいる』
殺す必要はなかった。

さく。

音にすればそうだろうか？

曹操は私の左胸に槍を刺した。

「…奪うこともできない味方にもならない。悪いが君は俺の道の障害物だ。ここで消えてもらう」

白いシャツがじわりと血で色を変える。
皮肉にも自分はF a t eの主人公と同じような殺され方だった。

逆鱗の一辺

—私は弱いからこんなことでしか役に立たないの。
体が少し軽くなった。



確かに曹操が持っていた槍は自分の胸を貫いた。
確かに自分はそれで死んだ。

それで安心した、後悔した。

なのに、なぜ意識がまだある。

なのに、なんでこんなに怒りがわくんだ。

こんなにもこいつに復讐したいと思うんだ！

「…悔っていたよ、流石は英雄の資格を持つものだ」

目の前に立っているのは人間だ。

そして……………マタ・ハリを殺した本人だ。

「がつー！」

気が付けば右手が伸びていた。

曹操の頭をつかみ地面にめり込ませる

『命の身代わり。英雄なる運命をその手にが持っている能力の一つだ。英雄が認めた相手ならば自分の霊基と引き換えに命を肩代わりすることが出来る。まあ、直す手立てもあるが英雄に認められないと使えないものだな』

どうでもいい、説明が聞こえる。

自分のえごで、自分の仲間が消えた。

ただ単に腹が立ったのだろうか。

子供の癩癩と同じようなものだ。

だが、目の前の者は。

手を出してはいけないものに手を出した。

自分の自業自得かもしれないが、やったのはお前だ。

「…怒りで単調なスピード。いや単純な動きだからこそか。恐ろしいな自覚無しで無駄のない動きと体のスペック。思い。どれをとっても俺が理想とする英雄そのものだ」

いつの間にか曹操が遠くに立っていた。
何を言っている。

「黙って死ね」

右手に赤龍帝の籠手が展開される。

「…これは、逆鱗に触れたか。逃げさせてもらおう」

曹操が槍で地面をつくとその場所に沈んだ。

『転送系の術だな。もうこの近くにはいないだろう』

唸る、怒りで頭がいつぱいだ。

だけど、まだ手はある。

「令呪をもって命じる。霊基を直せ」

重みが増したような感じがした。

『焦るな。相棒、俺のからも確認はできた』

そうか。

「…よかった」

まだ、胸の中に多少のわだかまりがあるが大丈夫だろう。

これについては自分の心配性なものだ仕方ない。

『…下手に仲間を失えば覇に飲み込まれかねんな』

ドライブが何か言っているが気にしない。

さっさと帰ろう、マタ・ハリなら召喚もできるはず・・・多分。

「…せん…ぱい？」

誰かに見られてるとかないよね？



召喚の仕方がわからなかったので小次郎に令呪をつかい無理やり聞き出した。

そもそも、今いるのが判明してるサーヴァントって小次郎とランスロットと金時、あとマタ・ハリぐらいしかわかんないし。

「…んう…」

で、現在夜。

ご飯も食べ終わり風呂にも入り終わり、いざ寝るって時にこちらに呼んだので。

まあその、霊基は治ってるんだけどやっぱり体力消費するみたいで寝てる。

私のベッドでな！

起こすのもあれだしな。

それにしても、ほんとに無事でよかった。

確認するまで吐きそうだった。

自分は失うことになってないから。

ドライグには言われたけどやっぱり心配だった。

確認した瞬間泣きそうになったけど、どうにか持ち直した。

心配事もなくなったし自分ももうねるか。

床に毛布を敷いて横になる。

「・・・今日も疲れたな」

出会うはずのない二人

「マスター、朝ですよ」

落ち着いた気持ちのいい声で目が覚めた。

何かが頭をなでる。

それが心地よくまた、夢の中へと入ろうとするが理性がストップをかけた。

…自分は床で寝たはずで枕なんてなかったはずだが…。

頭を感じる優しい感触と目の前の小麦色のお山は何なんでしょうか？

膝枕ですか!?!なう?!いま膝枕ナウなの!?!

「…ああ」

冷静に行け自分!

自分に自分でエールを送る。

私はマタ・ハリの手をつかんだ。

「…なぜ、あんなことをした」

自分でも少し声が震えているのがわかる。

聞いておきたかった、自分なんかのためにこの人は自分の命を投げ出したのだ。

「…私は君たちが知っているマスターではなくそれを取り込んだだけの別人だ。なのに、なぜ君は自分の命を使った」

つかんだ手を優しく握る。

「私ね、戦えないの」

いきなりのカミングアウトに一瞬だが思考が止まる。

「戦力にならない私を、戦えない私をあなたは家族としてみてくれた。寂しい時はいつでも隣にいてくれた。体目当てじゃなく私を好きと言ってくれた。あなたは確かにマスターじゃないかもしれない。でも、それでもあなたはマスターなの。こんな弱い私をこんなに心配してくれる人なんてマスターしかないもの」

「…そう…か」

「そうよ」

頬が何かに濡れる。

おかしいな、あくびもしていないはずなんだが。

「マスターは泣き虫ね。そんなところも私は好きよ」

「そう…か」

優しくなでてくれているマタ・ハリ。

時間を忘れ自分はその感触に身を任せた。

親に見つかりました★

★

「で、この人は誰なの命？」

家族会議なう。

チキチキ命が女を連れ込んだ！

どうしてこうなった。

いや、連れ込んだ…ではいるのだが決していかがわしいことをしていたわけではない。

そんなことも一切思っていない。

「え、えーとだな」

親父殿はすでに会社に出勤した。

要するに逃げ道はゼロである。

昨日のせいで体も少しおかしくなっており今日は学校は休んだ。

「お母さま実は」

自分が言いよんどんでいるとマタ・ハリが話し出した。

内容的には昨日襲われそうになったところを自分が助けた、夜で道にも迷っていたために仕方なく自分が家に泊まるかと提案し彼女がその案を受けたと。

まあざつくら省いたが内容的にはあっていることだ。

「まあ、この子が？何気に正義感の強い子だとは思ってたけど」

母よ、相手が英雄だというものもあるから仕方ないがだまされすぎやしないか？

少し心配である。

「まあ、それなら仕方ないはね。マタ・ハリさんだったかしら？」
「はい」

何か考えるように言う母。

「親御さんに連絡はしたの？」

「いえ、小さいころに両親は他界したので」

すつと影を落とすマタ・ハリ。

こんなところで演技に全力をだすな！

「そう、なら少しこの家にいなさいな。心配なことはあるけど命もいるし大丈夫でしょう」

なに言ってるの母よ！

「いえ、私なら大丈夫なので」

「だめよ、女の子一人で何ならこの家に住んでもらってもかまわないから」

マジで何言ってるやがりますか！



その後なんだかんだで住むことに決まっちゃった。

家にいるのも少し気まずいので、マタ・ハリと母を家に置いて外に出た。

「…殺す覚悟持たないとこれ以上はダメだよなあ」

近くの自動販売機で珈琲を買う。

そのまま歩きながら少し考えた。

このまま物語が進むにつれて相手を殺すこちらが殺されるという場面は多い。

自分のせいで曹操はこの町にいるし墮天使も自分に目をつけている節がある。

『殺すのが嫌なら倒しちまえばいいじゃねえか』

簡単に言ってくれるなよ。

金時の言葉に返し空を見上げる。

「空は青いのかなあ、おさきは真っ暗だあ」

『重症だなオイ』

うるせえのよ！酒吞童子にまだに恋心を忘れられなくせに！

だまし討ちしたことを後悔して行くせに。

『ぐはあ！』

『…的確に攻撃しているな』

「アーシア！」

「一誠さん！」

「なんでいるんだよ」

頭を抱えた。